

生命の一元論

小関彩子*

要 旨：近代科学は、物質は必然性の法則によって解明・予見されるという信念に基づき、身体を物質と見なすことで、身体を道徳・倫理と一致した魔術的身体観から解放した。しかし、精神をも同じ自然法則によって決定されていると考え、精神が新しい創造をする自由を否定した。本論考は、物質の一部でありながら、精神が物質に出会う場としての特権的な物質である身体を、ベルクソンの心身論に依拠しつつ分析し、生命を一元論的に考察する。

はじめに

西欧では古くから、精神と物質とはまったく異なった性質を持ったものであり、相反するありかたをしていると考えられてきました。このような精神と物質の二元論に対しては、その長所と短所について、近年様々な批判や反省がなされています。本論考では、まずこの物心二元論が果たした役割は何だったのか、その長所と短所をあらためて分析します。さらに、精神と物質とはどのように異なっているのかを考察します。その際に注目するのは、自由と必然性という観点です。さらに、精神と物質という相反する二つの項の間に、身体という第3の項をさしはさんでみます。身体とは、物質でありながら、単なる物質とは異なる生命体という、特権的な物体なのです。このような身体について考察し、そこに現れる生命という現象を手掛かりに、二

元論を克服することを試みてみましょう。

魔術的身体観

現在我々は、精神と身体を切り離して考えることを当然のことのように思っています。しかしながら、このような人間観は、近代以降の非常に特殊なものの見方にすぎません。むしろ歴史上では、心身を一如のものとして考える時代のほうがずっと長かったものであり、多くの文化圏においてそのほうが主流だったのです。身体と精神は明確に区別されず、混然一体となっており、そのまま全人格へとまとめ上げられていました。ところが、このような人間観は、時には病者にとって大きな苦しみを強いてきたのです。

かつて身体と精神がつながっていた時代には、病気は単に身体の不調というだけでなく、病気になった人自身の全人格的な

*和歌山大学准教授（ベルクソン哲学）

ありかたが病んでいるのだ、と解釈されることがありました。このような場合、病気とは病者自身の倫理的な問題なのだと見なされることとなりました。病者は宗教的・道徳的に汚れたものとして差別されました。たとえば旧約聖書に見られるように、かつてハンセン氏病は、神が罪を犯した者に対して罰を下したのだと考えられていました。それゆえに、治療・看護を必要としているはずの患者が、社会から排除され浄化されなければならない害悪だと見なされたのです。また時には、このような眼差しは、個人をこえて社会共同体の全体にまで及ぶこともありました。すなわち、病んでいるのは病者個人ではなく、社会全体なのだと考えられたのです。例えば、ペストは中世ヨーロッパにおいてしばしば大流行し、時には一つの都市が全滅することもありました。14世紀にはヨーロッパの人口の3割が失われたとさえ言われています。人々はこのようなペストの恐怖に対して、その原因はある一定の共同体が墮落していることにある、と考えました。社会の腐敗したありかたが、眼に見える現象となって現れ出たのがペストなのだ、と解釈したのです。そこには、神の怒りの表現が読み取られました。このような倫理観に基づいて、穢れの原因が追究されると、原因は一定の社会的弱者・少数者（よそもの、

ユダヤ人、異教徒などなど）にあるということにされ、大規模な迫害を生むこともしばしばでした。

同じような構造は東洋においても見られます。仏教における因果論とは、原因と結果が果てしなく連鎖していく関係についての、非常に稠密な理論です。しかしこれが一般に解釈されると、目の前で身体の上で起こっている何らかの現象の原因は、さまざまな業によるものなのだと考えられてしまいます。また、古代以来の日本思想においても、精神と身体は明確に区別されることはありませんでした。日本のものの考え方では逆に、精神の罪をあまり強調しません。一般に罪とは、心の内側の罪障や、それが実行に移されて外側に現れた倫理的行為の結果です。しかし、日本の基層を流れる感覚では、このような罪と、病や身体障害といった悪とは明確に区別されることがありません。これらは「ツミ・ケガレ」としてまとめられ、いずれも祓えば消滅するものとして対処されたのです。

梶谷真司氏は本フォーラムで、東洋における「身体化」という現象について発表されました。これは、心に問題があっても、それを身体の問題なのだと見なして、心理的・精神的病気ではないと考える傾向のことだと説明されました。これにならって言えば、身体の病気を「心理化」する傾向も

また、心身を一如と見なす思想から導き出されるところの、ある種の危険性を孕んでいるということが出来るでしょう。また聴衆からは、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という慣用表現に異議を唱える質問も出されました。たしかに、このような言い方が支配的になると、ひるがえって「身体が健康でないのは精神が不健全だからだ」ということになってしまいます。実際、明治以降の日本をはじめとして、多くの近代国家ではこの言葉をスローガンとして利用しました。そうして、国民を心身ともに健全で役に立つ人材となるよう育成し、総動員できるような体制が出来あがっていったのです。しかし、本来この慣用句のもととなったのは、ローマ時代の詩人ユウェナリスが当代の社会を皮肉った風刺詩の一節です。そこでは、「健康な身体に健康な精神が宿る」と断言してはいません。むしろ、「そうあればよい」という願望を表しているとも解釈できるのであって¹⁾、必ずしも身体と精神を同一視しているわけではありません。むしろ、この二つが同時に達成されることは困難だという現実を表現しているとも言えるのです。

このように、身体の病気に過剰な意味づけをなし、神話化することは、現代に至っても決して珍しいことではありません。アメリカの著名な作家・批評家のスーザン・

ソントグ (1933-2004)²⁾ は、自身が癌にかかったことをきっかけに、癌にかかるということがどのような経験であるのかを具体的に記述した『隠喩としての病』という論考を発表しました。さらに癌から回復した10年後、エイズの危険性がクローズアップされ始めた時代に『エイズとその隠喩』が出されています。そこで彼女は、死にいたる病と考えられた結核・癌・エイズなどの病気にたいして人々がどのようなイメージをいだき、どのような言葉で語ったのかを詳細に分析しています。ここでは、我々が病気という身体の物理的現象そのものに冷静に向き合うよりも、いかに色とりどりの物語・幻想・隠喩によって病気を解釈しているのかが明らかにされています。例えば結核は、ロマン主義の時代に情熱の病気とされましたし、癌はストレスに満ちた現代の都市生活と結び付けられました。さらにエイズには、社会的に逸脱した、健全な一般市民とは異なった嗜好をもつ特殊な人々というレッテルがつきまうことになります。このような様々な病気は、科学的な原因によって説明されるよりも、むしろ病者の気質・性格・情熱・抑圧などの隠喩を用いて解釈されることが多く、その結果身体そのものの病気が隠蔽されていくことにもなりました。

現代でも病者は「患者・病者」という本

質主義的なラベルを貼られた一個の人格とみなされがちです。つまり、病気とは本来、身体のある一部分が器質的に変化しているにすぎないのでし、病者も、身体の一部に病変をかかえてはいるが、発病以前となんら変わらないその人自身であり続けているのですが、発病と同時にその人は病者以外の何者でもない存在として眼差されるようになってしまうのです。

精神と物質

ここまでは心身を一元的に見る例を挙げてきましたが、これ対して、西欧的二元論はどのような物質観に立脚しているのでしょうか。物質とは、時間と空間の座標軸において、ある一点に位置づけることのできる存在です。物質は空間内の一部分を占める拡がり、延長であり、それゆえに我々はこれを知覚することができます。これに対して、精神とは物質ではないもの、空間内に存在するようなものではないありかたをしたものです。

近代になって自然科学が勃興すると、物質は精神と切り離されて解明されるようになりました。そして自然科学の仕事は、自然の世界の構造を、例外なく完全に理解することにある、と考えられるようになりました。自然とは物質の世界です。人間の精神が自然に介入し、自己の意志によって自

然に働きかけてこれを改変したのが、文化です。文化のような人工的な世界とは異なって、自然世界は法則に支配されています。だからこそ、ガリレオが「自然は数学の言語で書かれている」と語ったように、この世界は数学によって読み解くことが可能なはずだと信じられたのです。

ここで世界を理解するということは、まず、世界を構成しているさまざまな部分をできるだけ単純な要素にまで分解することです。次に、ばらばらにした要素を再び組み立てなおします。こうすることで、世界全体を支配している必然的な法則性を発見することができれば、すなわちそれが世界を理解したということになるわけです。

物質とは、外界からのある作用に対しては、必ず一定の反作用をするように定められています。この作用－反作用関係は自然法則によって支配されており、あらかじめ完全に決定されています。それゆえ、この法則を知ることが出来さえすれば、同一の事象と見なせる全ての場合に適用することが出来ることになります。同一の原因からは常に同一の結果が、自動的に導き出されます。実証的に解明されたこれらの関係は、常に再現され検証に付されることが可能です。ここには、何か新しいものが付け加えられる余地は全くありません。だから

こそ、過去の物質の諸状態から法則性を計算し、それを用いるならば、物質の現在の状態をもとにして未来の状態を予測することも可能ということになるのです。

物質としての身体

このような物質観は、身体にも導入されました。身体をあくまでも物質と同じものとみなし、精神から区別するところから、心身二元論は成立しています。そして、こうして成立した身体観は、近代西洋医学・生理学に大きく貢献することとなりました。

身体が単なる物質の一部であるのならば、物質と同じように、自然法則によって必ず解明できるはずです。すなわち、身体には本来不確定性が入り込む余地はありません。この信念のもとに、物質界のメカニズムを身体の生理作用にも次々に応用して、偉大な発見が為されてきたのです³⁾。例えば数学を基礎とした物理学の発達に伴って、これを人体に応用して、血液循環のメカニズムが明らかになりました。また、燃焼作用をモデルとした呼吸作用、化学変化をもとにした消化などの働きが解明されるようになりました。ここでは、身体は機械と同じようなものとして扱われることとなったのです。

近代的な身体観・物質観は、実験と観察

という方法を手に入れた実証的な医学の発達を促し、魔術的身体観から我々を解放してくれました。それによって初めて、身体を善悪の価値判断から分離し、単純に客観的な技術の手に委ねることが可能になりました。極論すれば、物質としての身体観が、我々の身体を精神の桎梏から解放した、とも言えるでしょう。

精神の異質性

以上のように身体を物質と同一視した場合、無機的な物質と同様に、我々の身体は常に必然性の法則に従って決定され、情性により動かされているということになります。物質に自由はないのです。だから、身体にも自由はありません。科学は物質的世界を解明するのに大いに貢献しましたが、さらに我々の行為までも科学的に解明することを課題とするようになりました。諸科学は我々の行為に法則性を見出し、それを自然科学に基づけることによって、行為を一つの理論で理解できるようにしようとしました。さらには、法則に基づく必然性によって、未来の行為をも計算し、予測しようとしたのです。

しかしながら、我々は日々逡巡し、熟考し、選択し、決断し、行為しています。果たして、生命ある我々は自由を有してはいないのでしょうか。たとえ身体が法則の必

然性に拘束される物質であるとしても、我々はこれとは全く異なったありかたをした精神というものを持っている、ということとを認めることは出来るのではないのでしょうか。

「生」の哲学者 H. ベルクソン（1859-1941）^(注1) は、我々が意思的にする行為を物理現象と同一の方法で分析しようとする理論に、疑問を呈しています。19 世紀末のフランスは、パリ万博が開かれ、エッフェル塔が建設され、地下鉄が走るなど、科学技術のめざましい進歩によって社会が大きく変化した時代でした。人間の問題は全て科学によって解決できるかのような風潮が高まっていたのです。このような傾向に対してベルクソンは、合理的に分析するだけでは決して理解することの出来ない人間の具体的で生き生きとした生のありさまを、そのまま描き出そうとしました。

ベルクソンは、人間の行為と物質の作用を同じように科学的に分析できるという信念の背後にある決定論をとりあげ、これを批判しています⁴⁾。決定論とは、全ての先行条件が例外なく完全に認識されれば、その結果は完全に予見されると主張するものです。ベルクソンが問題とするのは、このような物質の原理が、精神にも適用される

傾向にあるという点です。ベルクソンは、科学的な法則性は我々の意志による行為を説明することは出来ないと反論し、次のように天体の運行と意思的行為との混同を指摘しています。

決定論は、物質的宇宙を意識存在と混同し、人間の行為と自然の秩序とを混同するという誤りを犯している。我々は現象間の客観的結び付きとその現象の観念相互の主観的連合を正確に区別し、外的世界と内的世界の間、客観的諸現象の継起と意識事象の継起との混同を避けなければならない⁵⁾。

このような混同は、意識の状態をあたかも物質のように固定した不変の一要素として取り出すことが出来るかのように考えることから生じています。因果性の法則とは、同じ原因が同じ結果を生むということです。ここから敷衍して、心理状態に関しても、同じ内的原因が同じ結果を生むと見なされがちです。しかしながら、そのようなことが可能となるためには、同じ心理状態が何度も繰り返し起こって来る必要があります。前節で見たとおり、物質界においては、一つの法則は同じ事象に対しては常にあてはまります。ですが、人間の心理においては、「同じ心理状態」というものは二度と再び起こることは

注1) H. ベルクソン：コレージュ・ド・フランス教授、国際連盟の国際知的協力委員会（ユネスコの前身）初代議長。1927 年ノーベル文学賞受賞。死後ユダヤ系としては初めてパンテオンに葬られる。

ないはずで。我々の心は刻々に変化しています。一つの経験を経るごとに、私の心はその経験を織り込んで成長し、もうそれ以前の私ではなくなってしまうはずで。物体は確かに、各瞬間においてそれ自身と同一であり、その瞬間その瞬間の今・今において存在しているにすぎません。物質はその内に時間性をはらんではいないのです。それゆえ物理学者は、同じ要素からなる諸条件を再び見出すことが出来るでしょう。これに対してベルクソンは、我々人間の心の特徴は、不断に流れる意識という点にあると強調します。我々の意識は常に流れ、二度と同じ状態になることは考えられません。心理的な様々な事象は互いに異質で、それらの事象のうちのいずれの二つも、一つの生涯の異なった二つの瞬間を構成しています。だから、二つの心理事象が互いに完全に似ているということは不可能です。なぜならば、心理的諸要素は絶えず生成していますから、同一の感情であっても、それが繰り返されるというだけのことで、まったく新しい感情となってしまう。ある心理状態を経験したというまさにそのことによって我々は変化し、次に似たような心理状態を経験する、その私は、既にその心理状態を経験する以前のかつての私とは異なってしまうのです。このあるがままの意識の流れを、ベル

クソンは持続という言葉で表現します。

意識を持つ存在者にとって、存在するとは変化することであり、変化することは成熟することであり、成熟するとは限りなく自分で自分を創造することである⁶⁾。

つまり意識の本質は持続なのであり、これが精神と物質の最も異なった特徴となっているのです。

持続する精神とは、自由な精神でもあります。常に変化する精神は、物質とは異なって、不確定性を含んでいます。意識を持った生命体は、外界からの作用に対して、機械的に一定のあらかじめ決まった反応をするものではありません。意識には常に、複数の選択肢の中から選択する余地があります。それゆえ意識には、必然性に拘束されない自由があります。それは、予知されない何か全く新しい可能性に対して常に開かれているのです。だからこそ精神は、それまで存在しなかった新しい何ものかを無から創造して、世界に付け加えることが出来るのです。

生ける身体

ここまで、精神と物質とがいかに異なったありかたをしているのか、考察してきました。精神は、物質の必然性の世界に不確定性と自由とを持ち込むのです。だがそうすると、物質と精神とがいかにして関係を

持つことができるのかという疑問が生じてきます。精神と物質をつなぐことが出来なければ、精神が物質から何ものかを受け取ることも、反対に精神が物質に働きかけることも出来ないということになってしまいます。

この両者を協調させるものとしてベルクソンが挙げるのが、生命体の持つ身体です。先に検討したまるで機械のような身体は、あくまでも唯物論的な科学主義が仮定する身体にすぎません。現実の我々の身体とは、物質の一部でありながら、精神が物質界からの刺激を受容し、自由な行為によって物質界に働きかける場となる、特権的な物質です。生命体は、決定論によって予測されないような、新しい行為を生み出すことができます。つまり生命とは、必然の中へさしはさまれて、必然を自分の利益になるようにする自由なのです。もちろん身体は物質世界を構成する一部分として、その原因－結果関係の法則性に従っています。自由による原因は物質の必然性を破ることはできませんが、しかし必然性を曲げることはできるとベルクソンは考えています。

では物質から身体、そして精神へと、これらはどのようにつながっているのでしょうか。ベルクソンはここに、緊張の諸段階を想定しています。つまり、意識がより緊

張すると精神が目覚めて活動し、より弛緩すると、意識は活動せずに眠ってしまい、物質の中に埋没してしまいます。生命体の意識は常に緊張と弛緩、凝縮と拡散を繰り返しているのです。我々人間は生物の進化の最も高い段階にあり、活発な精神活動をしています。それでも、我々が常に意識的だというわけではありません。たとえば無意識とは、それ自身の過去を何も保存しない意識、たえず意識自身を忘れる意識、各瞬間に消滅して再生する意識のことです。このような場合、意識は限りなく物質に近くなっていきます。

意識が緊張と弛緩の間を往復するさまを、ベルクソンは習慣を例として考察しています。例えば自転車や乗馬、ピアノを習得する過程において、慣れないあいだは、我々は初めは一つ一つの運動を意識しています。それは私自身から出る運動で、決意の結果として、選択を含んでいます。しかし、やがて運動どうしがつながりあい、機械的になり、決意や選択が不必要になると、意識は減少し、消えていきます。我々の運動が自発的でなくなり、自動的なものになると、意識はそこから引き下がります。こうなると、人間の運動も本能に支配された動物の行動や、法則に支配された物体の運動に近いものになってきます。そこには、予測を裏切るような不確定な自由は

見られません。しかし人間は、どれほど習慣が確立しても、完全に単なる自動運動に没入することはありません。いずれこの習慣に他の習慣を対立させ、全ての自動的な動きに他の自動的な動きを対立させるようになります。我々の意識の密度は、我々が自分の行為においてどれだけ選択をしているか、という大きさに対応しているのです。

この密度は、すなわち創造性の大きさを表しています。意識はこの世で出会う物質を通過する際に鍛えられて、より濃密な生のために備えています。精神の力は、自分が持っている以上のものを自分自身から引き出す能力なのです。人間の生命の存在理由は、自分で自分を創造し、少ないものから多くのものを引き出し、無から何ものかを呼び出し、世界の豊かなものに絶えず何かを加える努力によって、人格を大きくすることにあります。この点で、人間は物質から生命の躍動にいたる進化の一方の先端に位置づけられるのです。

自然は偉大な芸術作品のように動植物の多様な種類を創造しましたが、生物の形態は一度描かれると繰り返されて自動的な行為になり、生命の躍動は停止します。人間のみにおいて、生命の動きは障害なく続き、生命の動きが途中で創造した人体という芸術作品を通じて、精神生活の限りなく創造的な流れを創発するのです。

文 献

- 1) ユウェナーリス（藤井昇訳）：サトゥラエー 諷刺詩、日中出版（1995）
- 2) スーザン・ソントグ（富山太佳夫訳）：隠喩としての病 エイズとその隠喩、みすず書房（1992）
- 3) 小川鼎三：医学の歴史、中公新書（1964）
- 4) アンリ・ベルクソン（合田正人・平井靖史訳）：意識に直接与えられたものについての試論、ちくま学芸文庫（2002）第1章、他にも、時間と自由というタイトルで、中村文郎訳、岩波文庫（2001）等の翻訳がある。
- 5) 同著、第3章
- 6) アンリ・ベルクソン（松浪信三郎・高橋允昭訳）：創造的進化、白水社ベルグソン全集 4（1992）第4章